

◀ 書 き べ す 讀 必 の 民 國 軍 ▶

■ 天晴會講演錄

（第貳輯）（價格金貳圓也）
 （郵税金拾貳錢也）

▼本書は現代知名の諸先生が日蓮上人の人格及教義の研鑽を發表したるもの、日蓮主義が眞理批判の上に。また國民思想教養の上に。殊に國家存立の關係に於て、如何なる地位と權威とを有するかは。須らく本書六百餘頁に亘る金玉の文字によつて之を知るを得べし

内容
 林陸軍中將。本多大僧正。井上中佐。小笠原子爵。小林文學士。高島平三郎先生
 辻文學博士。松森僧正。五島子爵。姉崎文學博士。柴田一能先生。竹内久一先生
 田中智學先生等の講演也

■ 精神の修養

（各一部 金貳拾錢也）
 二部 小包 金八錢
 一部 郵税 金六錢

本書は本多日生師の海軍大學校における精神講話にして。帝國軍事教育會に於て印行したるもの。思想問題に注意を拂ふものは必ず本書を一讀せざるべからず

▲申 込 — 東京市小石川區白山町十七番地 三上 義徹。送金は（郵便掛金）二八八四〇

軍國と日蓮主義

大僧正 本 多 日 生

乃木將軍二年祭に詣つ 記者

生の戦と日蓮主義

三上 義徹

▲七と云ふ字と國難 ▲一切を武裝せり ▲山陽母に奉ずるの動機 ▲活動史

日蓮主義と日本

僧 正 野口 日主

統 一

號六十三百二第

號 月 拾

法 華 色 讀 論

時局と心理

女子大學教授 高 島 平 三 郎

顯本法華宗 大學 林 教授 關 田 義 叔

縮別 妙法華經 並開結

第壹種 紙裝 正價金貳拾
第貳種 布裝 天 金 正價金四拾
第參種 皮裝 三方金 正價金八拾
郵正稅金八拾 郵正稅金四拾 郵正稅金六拾 錢錢錢錢錢錢

▲文明人は最高の思想に接觸するにあり、法華經は最高文明の中樞也、日本人は文明人也、故に本書を備へ之を精讀すべき也、菊半截判にして携帯に便也

法華經講義

洋裝全二冊二千餘頁
定價金參圓郵稅金拾六錢

本書は本多大僧正が心血を瀉いて著されたるもの、日蓮主義を研究せんとするものは必ず本書を一讀して甚深の妙義を味ふべし、未だ本書を讀まざるものは速かに座右に供へよ

▲橘香集 並製(稅金拾錢) 勤行作法(稅金五錢) 製本出來△
△前號廣告の國民思想講演輯全部賣切れたり▲

生の戰と日蓮主義

人生は生の戰である、自體、戰自身の意義は、自己の生を保全し充實せんが爲に、對手の生を拒否せんとするのである、即ち生と生との戰にして、自己の生の擴充と實在を保全せんが爲に起るのである、

右の頬を打たれなば、更に左の頬を向けよと云ふ無抵抗主義は、自己の生の實在を否定するものと謂はねばならぬ、現に人生は人生其物が戰ひつゝ居るてはないか、萬有の全體其物が戰ひつゝ居るのは事實である、萬有の自象を觀れば、殺さるゝものがあるから生きるものがあり、生きるものがあるから殺さるゝものがある、生々あり殺々あり、さうして萬有は儼然として秩序を維持して居る、戰ひは萬有の實相であつて、無始久遠より無終に亘りて息まざるものである、この自然の規律に因りて善く戰ふ所に、人文は明かに自然は開拓發展しつゝ居るのではないか、されば國の上に於ても、其の實在と平調を保全する上には、武器を把りて他の生を拒否するの決意斷行あるは道に背いた所行であるとして決定するは理義に合はぬことである、況してや、人文の秩序を紊す振舞あるも

のを懲すに於て、その戦ひ自身が人生全體の平調を圖ることになる、若しや人生に絶對に戦ひを拒むならば猛烈なる競争は起らない、競争がなければ努力の躍動を缺く、努力の缺くる所には發展を見出すことが出来ない、斯くては生の向上が無く人生の生活を縮少せしむるものである、人生は飽くまでも戦ひである、また實社會に於て、自恃の心と雄々しき氣力を鼓吹せねば、各人の生の保全を遂ぐる事が出来ぬ、されば、そこに人間界には断えず戦鬪の開かれつゝある事を會得せずには居られない、從て自からの強き力を以て一切内外の敵と決戦を試むるのである、然らざれば、新らしき生存上の地歩を確實に占むることは出来ない、吾等の生活上のこの力は、人生の戦ひを爲しつゝある間に自から享け得るのであつて、全く努力奮闘の賜である、この燃ゆるが如き精進の意氣あり、而して始めて吾人の向上が在り生の擴充が在る。

日蓮主義は戦ひである、その戦ひは息つく間もあらせぬ突撃戦である、精神生活の白熱點に歸結を見出さうとする戦鬪主義であつて、生の先天内容をどこまでも擴充せんとする發展主義である、宗教的靈の爆彈を投下して惡魔の軍勢を屠るのである。

「かたきは多勢也、法王の一人は無勢也、今に至りて軍やむ事なし」

と戦ひを宣し、教團の教ゆる信條教化は生の擴充を否定せんとするの傾向あるを看破

し、更に新らしき主義を高唱して、絶對無限なる宗教對象を旗點とし、孤軍奮闘敵陣を突いたのである、日蓮主義は飽くまでも動的である、動いて息まざる努力と、さうして断えざるの進行とは日蓮主義の戦である、日蓮主義は嚴肅なる信仰生活を中心とする思想であると同時に、徹上徹下向上戦鬪主義である、若し進み行く前に障礙の横はるものがあれば、吾が信仰生活の絶對性を以て、それに打ち勝ち得可してふ自信と勇氣との力が、精神的に猛然として驀進するのである、身命を賭して戦ふのである。

「法華經の御爲に身をも捨て命をも惜まされと強盛に申せしは是也」

とは、正しく粉骨碎身主義である、一戦に全力を傾盡するの思想である、自己の一死を以て敵の全軍に當るのである、断じて回避的の弱々しい態度を許さない。

「各々我弟子となのらん人人は、一人もをくしをもはるべからず」

いかに明白なる男性的決意ではないか、されば日蓮主義の戦鬪の前には、敗ける勝つと云ふ事は問題になつて居らない、必ず全勝の凱歌を奏し得ることを確信する。

「終に權教權門の輩を一人もなく攻め落して法王の家人となし天下萬民諸乘一佛乘と成て、妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば」

と高擧せられたるは、即ち全勝主義である、敵の戦鬪力を粉碎せずんば息まざるもので

ある、かゝる稟乎たる意氣と眞摯なる主張とを有つて、衆敵の中に毅然として踏み留まり、又は困苦缺乏の間に在りて豪然として剛健を示し得るは日蓮主義である。

「哀哉今日本國の萬人日蓮并に弟子檀那等が三類の強敵に責められ大苦に値ふを見て悦んで笑ふとも中略いかに強敵重なるともゆめゆめ退する心なかれ恐るゝ心なかれ」

世の多くの戦史中、斯かる雄壯なる實戰闘に於て、一種甚深の教訓を含める戦史が何處にあらうか、戦ひもこゝに至て莊儼性が加はつて来る、聖日蓮の一代における光輝ある努力は、この莊儼性の實戰史である、若しや世の人が囚はれたる批判を超越して、この止暇斷眠の實戰の響きに觸れなば、その崇高なる生氣に打たれて、眞一文字に日蓮軍の戦士たらんことを熱望するに至るであらう、さうして更に新たに、

「日蓮さまがけしたり、わたうども一陣三陣つづきて」

と云ふ進行曲を聴いては、誰人でも深くその心に共鳴し、もはや靜かに瞑想に耽つて居ることは出来ない、猛烈なる戦を以て敵の中腹を突き、生殺宜しきを得て宗教的生活への轉向を取らしめねばならぬ、斯様の重き最後の責任は、獨り日蓮主義の負擔する所、いてや歐亞の戦ひのそれよりも、更に一段の激戦を試むる事を要する、法敵は我が陣營の周圍に在り、旗鼓堂々、此の人生救済の爲に戦はむかな(この稿を草し筆を措いて窓を開けば、偶々四北の天、流星一條、光ぞ長く地に向つて流る)

軍國と日蓮主義

大僧正本 多 日生

軍國に際しては何人も何等かの考慮を抱かすには居られない、大體に就て考ふれば、この度の歐洲の戦亂は、世界の文明に如何なる變動を與ふるであらうか、又我日本國將來の國運に如何なる影響を及ぼすであらうかと云ふ點が、大切な着眼であると思ふ。

近代に於ける文明の傾向とか、道德の主義とか、宗教の主張とか云ふものに就て、大多數の人々が抱持して居つた思想には、一大變化を來すであらう、多くはこの度の戦亂に就ては驚愕の眼を以て之を見、從來自己の考慮の誤りたるに氣付いて、呆然たる者が少なからざる事と思ふ。

戦局の形勢を表面より觀察すれば、如何にも壯絶快絶の事であり、雄心勃々たる人も多いてあらうが、他

面から心靜かに戦争の慘狀を考察すれば、何人も悚然たらざるを得ざるものがある、白耳義が獨軍の蹂躪に遭ふて歴史的由緒ある建造物を破壊せられ、又無數の壯丁が無惨な戦死を遂ぐるの光景に想ひ到らば、財産も人命も土芥の如くに扱はれ、血を流すは水を流すが如く思へと云ふに至つて、酸鼻の狀観るが如くである。而してこの悲惨なる光景は、何事を吾人に教へつゝありやと云ふに。

第一物質的文明の窮極する所は、遂に獨逸の如き軍國主義の國家を生み、自己の利權の爲には何物をも蹂躪し去つて顧みない暴虐を逞ふするに至り、内には國民を飢饉に導いて社會の秩序を破壊し、財産と人命とを失ひ、外には他國に侵入して其國の歴史的文明

を破壊し、肝腦地に塗みるに至り、而して戦争の終局は卒かに豫斷し得ずと雖も、勝つも負くるも世界の人類をして、人情を險惡卒業に傾かしむるの大なるは、何人も豫知し得べき所である。斯かる軍國主義が十九世より滔々として進み來れる物質的歐洲文明の總計なりとせば、物質偏傾の文明は人類に斯の如き悲惨の結果を齎すものにして、實に咄ふべき文明なる事が、極めて明白になりし事と信する。

第二には軍國主義の反對に立ちて、極端な個人自利の思想に走り、國民の團結を輕んずる國家は、其の方針に就て大なる反省自覺を要する事が明かになつたと思ふ。聯合軍は未だ戦敗の汚名を受くるには至つて居らぬが、兎も角も開戦後二ヶ月を出でざるに、早くも國都を他に遷さざるを得ざるに至り、而して毎戰有利なる戦果を攻め得ざるに見れば、佛軍を目して勇猛なる軍隊と稱するを得ざる事は明かである。思ふに是れ國家觀念の鞏固ならず、國民の團結心充實せざるの致す所にあらずや。即ち軍人精神に於て獨逸に比して劣

る點の存するにはあらざるか。夫れ斯くの如く國家の實力にして衰耗するに至らば、到底其の國の理想を宣揚して、人類の間に文明を進展せしむる主動者となるは望み得ざる事であらう。

米國は近來モンロー主義の擴張などと云つて、東洋に對しては帝國主義を行はんとして居る、然れども大體國民の團結が充分でなく、その國民の道徳も個人自利主義にあれば、戰爭に於て優越せる力量を顯はし得るや否やは、確かに一個の疑問に屬する。又支那の如きは版圖の廣き人民の多きに拘らず、一向に振はないが、これは主として國民に國家的團結精神の缺乏せるに由る事と思ふ。

之に由つて見れば、獨逸のごとくに國力が充實しても、唯物的利欲の精神を中心にして置いての國家の發展は遂に人類の上に慘禍を來たすに至り。又佛國の如く國家思想の減退するに於ては、他の後塵を拜さねばならず、榮ふるも人類を毒し、衰ふるも國民を毒す、之を如何せば可なるやと云ふに、こゝに大切な新らしき教

訓が與へられて居ると思ふ。

近時に於ける我國の道徳論者を見るに、淺薄な人生觀に流れて、皮相的な自然主義や、自利的な個人主義や、輕跳無謀な自由主義が勃興し、又唯物思想に馳せて利益と權利を以て、人生行路の最高目標となし。又貧弱固陋な帝國主義を謳歌して居つた人が多いためである。これ等の人々はこの度の歐洲の戦亂に就て、如何に判斷して居るかと云ふに、恐らくは只錯愕に陥り舉措を失ふて居る事であらうと思ふ。尤も自己の思想に就て、從來の主張と今後の變動との間に存する矛盾を氣付かざる程の痴漢は論外である。

この錯愕と失望とは、決して道徳論者の上のみに止まらない、宗教家に於ても同様によくは驚愕と懊惱の裡にある者と思ふ。其は彼等は今日に至るまで宗教は個人對絶待の關係なれば國家社會の影響如何を顧みるに及ばぬ、宗教が國家や社會の影響の如何に依つて抑捨せらるゝは、一箇の愚見なりなどと云つて、得々として居たのである。斯かる宗教家は今頃何んな思ひを

して居るであらうか、この際にも猶平然として從來の主張を所持し得る者ありや、其は畢竟社會と沒交渉の空論家たることを證明して居るものである。彼等は發返りを打たうか、旗印を換へようか、今少し様子を見ようか、何うしたものだらうと云ふ有様で居りはせぬか、宜しくそんな心配を止めて、偏傾せざる完全なる主義主張を立つ事にするがよいではないか。或者はこの度の戦亂に懲りて、世界各國は當分戰爭は仕まい、平和主義人道主義が大に勃興すると考へて居る者もあらう、又或者はその反對に大に軍國主義が勃興して、人道主義や宗教の思想などは顧みられないと思ふ者もあるであらう。

これ等右往左住の觀察は、寔に憐れな短見であつて未だ人間の性情を徹見せず、又人類の歴史を達觀せざるの雅見と謂ふべきである。凡そ人類は物質と精神との兩面の希望を有する事は、古今東西に亘りて變はることなく、又自利利他の思想を兼有することも、同じく不變である。而して國家的團結を通じて、この物質

欲精神を發揚し、又自利利他を満足せしめんとする事もこれ皆人類古今の常態なり。故に國家團結の上に抱ける理想目的の如何に由つて、其の國家の行動が人類全體の上に及ぼす影響の差異を生ずるのである。而して其の國家の理想目的を崇高にし、善良に導くものが、是れ即ち一國の名教である。其の名教の如何が國家の理想を造り、國家の理想が人類の文明を造るのである、故に凡そ文明の觀察を下さんとするには、先づ名教と國家と人類との連絡を一貫して考察するを要す國家主義の興立に依りて表ふる宗教や道徳は、即ちその國の名教たるの資格なく、又其國家の興立の爲めに人類に慘禍を齎らすが如き事をなさしむる名教は、他の國民即ち人類一般より見て共同の敵とすべき邪教なり、故に健全なる名教と健全なる國家とは、如何なる場合にも離反すべきにあらず、又健全なる國家と健全なる世界の文明とは、兩者相俟つて離間せらるべきにあらず、斯の如き理想に在る道徳宗教を採用し斯の如き理想に在る國家を興立し、以て人類の健全なる文明

を完成すべきである。されば國家主義の勃興して人道や宗教の顧みられざるが如きことありとせば、左様の國家は到底隆昌を望み得られざるべく、又國家組織の鞏固なる發達を理想せざる如き道徳觀や宗教思想は、今後採用せらるべきでない。而して獨逸が我欲の爲めに人類の文明を毒するが如きは、是れ明かに其國家の理想が崇高ならず正義に存せずして、唯物的利權に走れるの致す所であり、随つて一國の名教となれる基督教が、この不正不義の欲望を折伏し得ざるものにして其教の主旨が誤れるのであるか、若くは之を折伏する力を失へる事を證據立つるものである。其道徳宗教の理想が其國家を正義に導く力を保有せざるに於ては、其道徳宗教は畢竟國家が罪惡を犯す先棒に使用せらるゝに過ぎず、若も不正不義の國家の欲望の走狗となるが如きものならば、道徳宗教の神聖果して何れにありやである。又佛國が極端な個人主義に走り、又自利的な社會主義などの勃興して國家的團結を輕んずるが如きも、人

類の文明を完成するに於て一個の謬見たるを證せり、由來人類の社會に於ける戰爭なるものは、恰も小さき雲のチラリと見えたりと思ふ間に、俄然として一天墨を流すが如くに漲りて、沛然として降り來るようなもので、人類の歴史約四千年を通じて三千八百六十餘年は戰爭をやつて居ると云ふ事であるから、非戰主義や國家の結合力を輕視する者は、必ず衰滅に歸せざるを得ざるは事理極めて明白である。故に縱令今回の大戦亂に由つて戰爭の慘禍に懲りたとしても、其は少しく年月を経過すれば、直ちに人類歴史の常態を繰返す事も明かである。或は却つてこの大戦亂に由つて戰爭熱を亢進するかも知るべからず、恐らくは戰爭に懲りるよりは、武力の競争を喚起するものかと思はる、歐洲では今度の戰亂を最後の戰爭と云ふて居る人もあるが其は無責任な人々の泣言であつて、到底人類社會には武力を無視する時は永久にないであらう、寔に悲むべき事ではあるが、人類の常態として如何ともし難いのである。故に武装せる國家に理想を與へ正義を教へ、

一國の名教を興立して物質利欲を國是とするを誠め、如何に武力を擴大するも、如何に財力を充實するも、より已上に理想を尊み正義を守り、名教の權威を信奉せしめて、正義と武力と財力とを抱合一致せしむるを以て、人類の文明を健全に導く最高最善の方法と認むべきである。若しも眼識こゝに徹底せず、些少の世相を見て右往左往する如き思想家や宗教家は、斷じて共に語るに足りないものである。さてこの意義に於て軍國を解釋し來りて、我日蓮主義の主張を顧みるに、建宗當時日蓮上人に由つて唱道せられてより今日に至るまでの主義主張が、正しくこの文明の指導者を以て任じ、この我帝國の國家的大理想を教へて居るものである。日蓮主義は佛教の本旨を中心生命とするは無論の事であり、其處には一切の人類を濟度せんとする大慈大悲の思想を守持するは言ふを須みず、如何なる愚者悪人弱者病子をも懺悔教化するは勿論、又如何なる智者賢者富者大人をも攝化利導する所の教である。而してこの廣い慈悲博愛の大精神

を行ふに、國家的思想と調節して行くことを教へて居るのである。只今回の日獨戦争のみに就て見れば、何等願慮するを要せざる如きも、我國が健全に國威を發揚し、以て建國の大理想を實現し實行し得るには、今後幾多の難關に遭遇するや知るべからず、こゝに益々御皇室の御後威の昌へまさんことを祈り、我國民の精神を十二分に堅實にして而して一國の完全なる名教を興立し、正義と武力と財力との調和的高度の發達を期せねばならぬ。日蓮主義は慈悲博愛の精神と同時にこの思國の大忠を抱いて立つ所のものである。

國歩が如何に困難な狀況を呈することあるも、決して沈勇剛健の意氣を失ふてはならぬことを教ふるが日蓮主義である、上人が大蒙古國の襲來して國民皆恐怖の裡に在るの時に當り、毅然として小蒙古何をか爲さん、大日本國に向ふは鷹の前の鳩、獅子の前の兎に同じと喝破し、斯の大勇猛と共に至心に佛天の感應に訴へ人事天命雨つながら盡し得て泰然動ぜざるの意氣を高潮せし如きは、以て永遠に國民の記憶し服膺すべき所

であらう。

日蓮主義は單にこの意氣を鼓舞するに止まらぬ、尤も着實に各自の職分に於て勤勉努力の覺悟を教ふるものである。上人が天晴地明を唱へて世法の重んずべきを説き、資生産業皆佛法と違背せずと教へて武力經濟を尊重し、人生の生活を輕視せずして、而かも崇高闊大なる理想を宣傳し給へる所は、是れ亦永久不易の大教訓である。

元來日蓮主義は、軍國の際に起りし宗教なることは世人の一般に知る所であり、日蓮主義の背景には軍國的の心得が尤も豊富に畫かれて居るのである。而して軍國の思想を重んずると同時に、之を道德化し宗教化せられし所のものである、故に上人はこの理想を一言に喝破して、「知法思國」と云ひ、又「天晴地明」と云ひ、又「立正安國」と云ひ、又「源遠流長」と云ひ、一代を通じての言動が凡べて充全なる信念理想と、調節せる國家觀念とを貫申し給ふて居るのである。

△法 國 歌

之に由つて日蓮主義は能く人間の性情を徹見し。又能く人類の歴史を達觀して、本格に名教と國家、國家と人類、人類と文明との關係を解決せる主義であり従つて軍國に處しても、平和に處しても、國民として、人類としても、佛子菩薩としても、何れにも毫末も支障を生ぜず、一箇の渾然たる統一の大信念大理想を以て終始すべし。何時の世にも人心感化の聖位に立ち、國民指導の寶座を占むることが出来るのである。我國民は宜しく小事相小現象に就て、右往左往するの縮態より覺めて、日蓮主義に拜跪し、以て軍國民たるの本分と、大平和の使命とに盡す所あらんことを切望する次第であります(完)



- (一) 朝日の旗は。世界を照らす。日本の國は。神の國。共に護れ。命をかけて。日本の國は。神の國。
- (二) 妙法華經は。諸經の王ぞ。妙法五字は。世の寶。共に持て。生命をかけて。妙法五字は。世の寶。
- (三) 一切衆生。皆吾が子ぞと。佛の慈悲は。際限もなし。共に頼れ。三世をかけて。佛の慈悲は。際限もなし。
- (四) 末法に出し。日蓮大士。我等が爲の。大導師。共に仰げ。この貴さを。我等が爲の。大導師。
- (五) 一闍浮提。遍く照らす。教の源は。日本國。共にうたへ。この貴さを。教の源は。日本國。
- (六) 皇國を護り。教を護れ。力の源は我がこゝろ。共に磨け。生命の限り。力の源は我がこゝろ。

■ 乃木將軍之二年祭に詣る ■

回顧すれば大正元年九月十三日は日本國民にとつて追憶深き記念の日である。明治天皇の御靈柩が今しも宮城を出てまさんとして、號砲一發御發引を報じた一刹那、乃木將軍夫妻、又伏して殞死し奉り、日本國民に強き教訓を示されたのも、はや二ヶ年の昔となつた、今や山東の野に膠州灣の波の上、我が精銳なる陸海軍は怒濤寒苦と闘ひつゝあるの時さらに將軍を追慕するの念深きものあるを覺ゆ、去ぬる九月十三日午前八時、赤坂新坂町乃木邸に於て、莊嚴なる二年祭は行はれた、將軍の英風を敬慕するもの老幼男女の別なく降り翫く雨を冒して集まれる其數幾萬、將軍の國民に與へたる訓化のいかに偉大なるかを知る。

乃木邸に於ける大將自刃の室には、血潮の流れた儘の疊、一種強烈なる靈感に打たれて云ひ知れぬ涙に泣いた、夫人の居室に飾られ

た鏡臺の鏡、雨のためか將た涙のためか曇る、予はた將軍の崇高なる人格の生命が、現に澄潮として現代人の精神を刺撃し、日本魂の發揮に努力せよと教ゆるものあるを感ずるのである。

予は一周年祭の時、將軍の墳墓に詣りて、その所感を本誌上に告白せしことありしが、いままた將軍の墓前に拜跪して感慨無量、墓地への路傍には女子供が悲愁な聲を絞つて禱を賣つて居る、参拜者は踵を接して來る學習院初等科の生徒、將軍の墓前に参拜しては胸逼つて目を瞬きつゝ去る、陸海軍の將校、知名の紳士、孰れも親しく將軍に接するが如く無言の裡に禮拜して追憶の涙に咽ばざるものはなかつた、青山の墓地に靜かに眠る護國の神、顯に冥に國家的武士道を推護し、その發揮に神祕を垂れよ、いまや、我兵動いて武士道色讀の機會に在り、願はくば將軍の偉靈、我軍の士氣を激勵して皇帥の全勝に力を添へよ、予は墓前に默禱し合掌し禮を作して去る(三上生)

七と云ふ字と國難

七と云ふ字は、日本國に特別の因縁があるのであらう、七と云ふ字と日本國は、いかにも深い意味の存することを感得する、明治十七年には朝鮮事變があり、二十七八年は日清の國交が破れ、我兵遼東の野に戦つて局を收め、三十七八年日露の戦が北滿洲にあつてから、世界には之と云ふ戦争はなかりしも、このたびの歐洲戦亂は、遂に日獨の開戦を見るに至つたのであるが、丁度十年毎に國難が起る、國難の起る時は必ず七の數字が付いて居る、どうしてもそこには神祕的關係の存する事を考へずには居られない、之を日蓮上人の主張に聽けば、無上崇嚴なる我帝國の宇内統一の使命遂行の先序として、また一面には、法華經主義世界發展の瑞相として、この前古未曾有の戦亂が起つたのであるまいか、戦争の起りは、其相戦ふべき國際問題の近因があるとは言ふものゝ、其遠因する所神祕因縁の然らしむるのではあるまいか、日蓮上人は「佛法必

可出。自東土日本也。其前相必超過正像。天變地天有之歟」と、戦争は總ての文明に對する一新紀元である、さればそこに甚深なる意義が含まれて居ると思ふ何はさて七と云ふ字と國難、南無阿彌陀佛は六字である、南無大日如來も六字である、日蓮上人の壽命を睹して弘められたる七字の題目と同じ七である、國家の上になる大問題が時の上に七と云ふ字が付いて、日蓮主義の最高教義が題目の七字である、加ふるに日本と日蓮と云ふ日の一致、この點まで考へて來ると、日本國と日蓮、七字の題目流布と日本の國難、法國冥合王佛一如の理想、それが理論でなくして眞に實際を語つて居る、この戦や、日蓮主義が日本國家の威力と相合して、閻浮統一の救済の時間を早めつゝあるのではな

いか、七と云ふ字は、他の宗教とは全く關係がないのであるけれども、七字の題目の旗を押立て、宗教戦を開始して居る日蓮主義には神祕因縁の存するを感ずる。

日蓮主義と日本

僧 正野 口 日 主

今や時代の變遷に伴ふて、宗教の急要なるを自覺するものが多くなつて來たことは、一大事實でありまして喜ぶべき現象でありませうが、而しながら、宗教は單に個人と絶對との關係に存するものであると心得、國家と宗教との接觸に就ては觀察する所が無い、是等は未だ宗教の眞諦を得ざるものである、日蓮主義は其根底に於て國家と離るべからざる關係を存するので、國家莊嚴の教義である、他の宗教は國家などを云爲するものでなく宇宙主義人類主義でなければならぬと云つて高尚がつて居るものあれば、或は精神の上へのみ説くものもあるが、其は宗教の半面であつて全面でない、言はく宗教に對する半可通である、日蓮主義は本因本果本國土の三妙合致せるものでありまして、此三

方面の具備せる教義こそ圓滿の道理であると信ずるのである、即ち本因の吾人と本果の本尊との結合があつて、而して此本國土とを圓滿に立てたるものが、即ち全面の眞理である、今や歐亞の天地戰雲に包まれて居るが、この國家の健全なる發展を圖することは、國民全部の責任であると共に、亦思想の上より民心の結合を強固ならしめねばならぬ、此運動の實績を擧ぐるものは他の宗教に於て其任に當ることを得ざるものである是れ實に日蓮主義の天職使命である、禪宗などは根底に此教義がないから將來如何なり行くかは疑問である併し眞宗の人の如く國土の事は教義にはないが悪い事でもないからとの議論ならば續くかも知れないけれども民心訓練の權威を有しない、然るに日蓮主義は尤も

國家の問題に全力を捧げて居るものでありまして、日蓮上人が立正安國と云ひ、法國冥合と唱へられたのは正しく之を證明して居る事實であります、故に教義上に於て本國土といふ文字を用ひて居りますが經典には多く國土と説いてある、是れ日蓮主義が將來我が國に大戒壇を建てる先序であつて、此意味からしても國土と書く方が概念を把住し易いと思ふ、佛教では淨土といひ佛土と云ひ土の字が多く使はれて居る、凡そ宗教としては本果(佛)と本因(人)と本國(土)とを合さねばならぬ、佛あつて土なきものはない、依正不二なれば離すことの出来ないものである、吉田松陰先生も「人あれば土あり」と云つて居る、故に人があつても土を見なければ關係を明かにすることが出来ない、人間の身體なれば肉體と精神とのやうなものである、土を取れば草は枯れるが、人間も土を踏みながら歩いてさうして生活を送りて居る、宗教も亦た同じ理義合せて精神を主として論ずるが爲めに、身は何うてもよいと云ふ様な人が出来るけれども、それは誤りである、禪

の如きは即ち是れである、併し實は國土をも莊嚴しなければならぬ、此を以て日本特有の忠を論ずるにも古來土地との關係を説いて居る、乃木大將の愛讀書なる「國基」にも水土論といふ一篇がある、矢張水土によつて人間の精神も變るものである、何うしても生活の國土が尊いから、大和魂が現はれるのである、支那ならば忠の現はれる國でない、近頃食鹽醫者といふのが出來て居る、之も一面の眞理だと思ふ、上人の主義は此根底から國家を觀察して居るのでありまして、上人出現の大事は、題目と戒壇と本尊との三大問題の爲めであつて、其戒壇といへば即ち土地を撰ばなければならぬ、日蓮主義は國土と合體して活躍せねばならぬ而して上述の三妙は縱横に論ぜられねばならないので、古人は一塵にも國土あり一心にも色心を具すと言つた論法よりすると、心の上だけに國土を論ずることが出来る、が併し此は猶ほ理(理論)であつて、事(現象)の上より云へば國土を撰むことが大切である其上から云へば我國の如き八萬の國にも越えたる尊嚴

なる國土の上に大戒壇を立てやうとせられた上人は、此の教義の根柢より來つて、事の法門の上より日本國を撰ばれたものである、決して偶然に此土に生を受けながら此國を有り難く感じたのではない、戒壇の壇とは處である、壇を建てるには其莊嚴の世界に勝れたるものでなければならぬ、佛教には十界身土と云ふ教義がありすが、阿れも土の意を含蓄して居るのである法華經の一念三千は、即ち五陰世間衆生世間國土世間が基礎である、此國土世間あつて、一念三千の法門も組織せらるゝのである、唯だ一念三千と云へば漠然たる様であるけれども、之を分析すれば即ち土がある、一念三千といへば其中に國土莊嚴の事も含まれて居るので、此上から上人は宗教の五綱を立て、教機時國序として、國の圓滿なる發展を圖られたのである、なほ國を説くことは諸經に甚だ多いので、寒國熱國惡國等の種類もある、宗教は何れの國でも構はぬとはいふが併し眞の威力ある國でなければ眞の弘通は出來ない、寒國などは宗教發祥の所ではない、我國は實に歴史的

方面から見ても、建國の精神より觀ても、深き根柢と價値ある國であつて、釋尊の如きも亦た何れの點から觀ても完全な位置に在らせられた、何れの國でも皆前科者の國であるから、戒壇などは我國の如き清淨の國に建てねばなるまい、て上人の曼荼羅に於ても、依正不二の曼荼羅があり、又立正安國を宣言し守護國家の整ふた思想がある、其他上人の遺文は皆立正安國の主意から出來て居るのである、而して我日本國は法華經と尤も深い因縁關係がある、經には二十八品中東方と云ふ文が所々にある、そして其東方とは何となく日本國を指して居る、持國毘沙門廣目等の四天王は東北の方の四天王である、瑜伽論(彌勒菩薩作)の中に「東方有_二小國_一其中唯有_二大乘種姓_一」とあり、又肇公佛經記に「此經典有_二緣於_二東北_一汝慎傳弘_一」と言ひ、遵式の書に「始自_二西傳_一猶_二三月_一之生_一今復東返猶_二日之昇_一」とあるので、上人はまた眞の佛教は日本に起こり西方に光を及ぼすと仰せられた、其の外上人以前の豫言には皆東方として居る、傳教大師の如きも「語代、則像終末初尋_レ

地唐東翔西」と言つて居る、さうして日本國の神聖なるを賞して、「八萬の國にも超へたる國ぞかし」と云ひ又佛教の弘まるべきを「佛法東土日本國より起る」と仰せられ、更に宗教と國土との關係に就て、「闍浮第一の本尊此國に立つべし」と宣べられて居る、或人は左様な事は誰でも云へると言ふが、上人の如きは深き根柢より之を實現せんとせられたのである、禪宗には輿禪護國論と云ふのがあつて、名は安國論に似て居るが實は大に異つて居る、彼の書には日本國は邊鄙の國であるが佛は之にも及ぶといふに過ぎないので、日本を觀る上には甚だ不都合である、上人は八萬の國にも超えたるものとして見られたのだ、斯の如き人は外に一人もない、唯だ此一言だけでも億かに日本國の祖師てはあるまいか、傳教大師の如きも代々の天子は叡山の檀家とせられた、後宇多天皇は我國は秘教相應法身土なりと詔りたまふて居らせらるゝ、之を法門の上からいふと國土即寂光土であるか、此上からいふと八萬超過の國である、既に所居の土が淨土なるは能居の人

も淨土に住むだけの資格を有つて居る、法妙なるが故に人貴く、人貴きが故に處も貴い、されば宗教は宇宙主義だの個人主義などいふのは半可通のいふことであつて、其一面に偏すべきものでない、故に又國土世間の下種益といふ事もあつて、他の法門にはない所である、或は又非情世界の本因妙にて、國土も亦た人と共に本因妙となり、草木までも本因妙の位となるので、上人には身延の山河も法華の相を成したのである、而して戒壇は上人の教義に於て尤も重大事であるが天皇の勅によつて最勝の地に立つるので、此戒壇が日本國に建つべきものであるに依つて、即ち日本を戒壇國と云ふことが出来る、即ち日本は戒壇淨土である、然らば戒壇を立つるとは如何なる意か即ち法を國王大臣に附し王臣一同に法華經主義に信仰を捧ぐる時に在る、是れ全く根柢の教義より出づるのである、我國には本來神道皇道がある、今の神道は宗教的になつて居るが、元來は皇道であつて、尊き政治道である、故に眞の明教は三妙の日蓮主義でなければならぬ、國土を護る法

は法華經であるべき筈である、而して又大法を守る眞實の國土は日本國である、斯く王佛冥合法國一如の意義が上人畢生の主張であつて、佛敎東土日本國より出づべしと仰せられた佛敎は、即ち此佛敎である、決して印度の宗教でない、然らば則ち上人の教義と日本の明敎とは別物ではない、今茲に明敎と日本の精神との合致せる數個條を例示すれば、



皇室に三徳あり — 釋尊に三輪あり

如此日本建國の主義主張と上人の教義とは不思議に合致して居る、此等の意義を宗教的に現はして本尊として寫象されたのである、故に大本尊を見れば國體の事も依正不二の事も明かに含蓄されて居る、されば此本尊を拜すれば成佛は無論、國體擁護の意義とも

什上人の如きは六十七歳から七十九歳に至るまで、主上へ三度と鎌倉へ三回、老體を掲げて國諫せられた、又日與上人は道理を宣べて諫争するは是れ宗旨の洗義なりとして、強義を主張されて終に對島の國へ流された、皆一佛一王主義を主張されたものである、日親上人は燒鍋を冠せられても、日經上人は耳鼻を斬られても不撓の心を以て奮闘せられたのは、立正安國主義の命令を實行せられたものと信ずる、今や國難多事なるの時國の前途を憂ふるものは我が日蓮主義の國家觀を味ひ深く修養の功を積み國の爲に努力せられん事を望む。

▲日常の修養と健康

幸田露伴博士

- 一、人の終に究竟最勝地に達するものなる事を信ずる事(常不輕品の意)
- 二、食、居、氣(内的支持力を重んずるの意)

なり、衆生の救済ともなる、眞に日本及世界の修養の明鏡として他に比類なきものと確信する、なほ上人が口を開けば必ず國に及び、國と法とを離された事がない、四箇格言は即ちそれである、斯くの如き國土論は上人の重要な主張であつたから、從つて後年門下の先師は此主義に盡されたのである、上人は實に國家に一身を寄與せられたもので、我れ日本國の柱とならん等と云つたものは、他宗教家中には未だ曾て聞かざる所である、然るに此所に又非難が起つて、宗教家として日本とは少し小さすぎる、抑も宗教なるものは世界主義でなければならぬ等と云ふものもあるが、日本が決して左様に小なるものではない、丈六の釋尊の身は久遠の佛であつたてはないか、又吾人の五尺の身は小なれども靈は宇宙に通遍して居るではないか、又上人は日蓮によりて日本國の有無はあるべしと絶叫し、又諸宗は本尊に迷へり、本尊誤れる故に日本國も隨て亂れるのであると唱道されて居る、されば此遺志を紹繼して代々の先師は國諫を決行して居られるので、日

一切を武裝せり

千代田の城を獲るお涙り水淨く澄んで、常盤の松は枝を鳴きや最と靜かに拜せらるれど、大内山に軍事を贊す大君は、秋の夜長の更くをなも大御心に止め給はず、吾皇軍の將卒が身の上や如何に、露營の夢や嗚かしかるべき、權上の任務の夫れや如何にと、お慈悲の御心を注がせ給ふと承るだに長き極みである、吾が六千萬の同胞も、大君の御慮の程を長みて、軍國の民としてその任務に精勵せよとあるべき、されば人の心も其他の事も萬事武裝されざるものはない、

▲宗教の信仰も武裝されて来た、宗教家は皇軍の全勝を神佛に禱り、出征軍人の家族も、國民の多くは自分の信仰を以て皇軍の勝利を祈らざるものはない、非戦論の張本である基督教の食堂でも、軍國の基督教など云へる演説を掲げて、日曜講壇に武裝演説をやつて居る、基督の本意から云へば、誠意ではあるまいが兎に角武裝して居る、之は軍國における珍現象の一つである。

▲上野の圖書館へ行つて都下における發行の重なる雑誌を一覽したが、軍國又は戦争と云ふ文字を使つて居らぬ雑誌は一部もない、雑誌店に就て聞いて見ると、軍國とか戦争とか云ふ文字の武裝がないものは、今の處少しも手に取らないと云ふ事である、殆んど武裝的競争の状態と云へる。

▲戦争になつてから小國民の遊戯ははマール箱で造つた格好の背囊を背負つて、紙製の軍帽や銃銃に擬した武器を携へて、寺や神社の境内で突撃遊戯をやつて居るがいかにも面白く勇ましい、遊戯が武裝された譯だ▲玩具でも繪草紙でも、戦争に關する品物を持ちまつて居る、子供なぞはさう云ふ店先へ行くと、一ツ買はなければ動かない、道行く人も立止まつて人山を築いて居る。

▲興行物は芝居活動寫眞等に至るまで、全部戦争當て込みて、日々の新聞廣告を見れば、いかに武裝的興行であるか分る、されば我國の現在に一切を武裝して居るものである。

時局と心理

女子大學講師 高島平三郎

(十月三日開演の大日本婦人衛生會に於ける講話の要領を摘記したるもの也文意記者の責に在り)

一體、人間は始めから今日の如き進歩をして居つたものではありません、ズット昔から段々と引續いて参りまして、今日の様な文明の結果を得て居るのであります、之は歴史を見れば能く解る事でありましたが、此歴史が始まつたのは僅かな年數でありまして、其歴史の無い以前の事は、人類學等に據りますると、人間と云ふものが此の世の中に生れてから、少なくとも二、三萬年以上の年月を経て居ると云ふて居りますが、其中で歴史として現はれて居る事實は、僅かに四千年か五千年位の事である、而して其歴史あつてから後、著しく人間が進歩して居るのであります、歴史に就て之を考へますれば、何の位人間が進んで来たかと云ふ事

る、人間は總べて外界と融合して進んで行くのであります、抵抗に堪へ調節の出来るものが段々重要な位置を占め得る事になるのであります、然らば斯う云ふ事の働きが何より起るのであるかと申しますと、それは心の働きてあります、身體許では抵抗も調節も出来るものではないが、心が發達して居りますから寒ければ寒い様に、暑ければ暑い様に、巧みにそれに適する様に計ることが出来るのであります、夫故に、人間が今日まで進んで参る間には、失望をした人もあれば犠牲になつた多數の人がある、さう云ふ犠牲を拂つた徳に依て重要な位置を占め、遂に現代の文明を形造る様になつたのであります、さうてありますから人間も、ズット始めに適はつて考へますと、水の中に居る下等の動物の様な時代を経過して、猿の様な木に棲んで居る様な時代に至り、始めて人間と云ふ形に進み人間になつてから野蠻時代半開時代を経て、遂に今日の如く文明の時代になつて来たこと云ふ事を調べて見ると、明かに證據が現はれて居る、それは人間の身體

は殆んど計る事が出来ない程であります、斯様に人間が進んで参つて、尙ほ種々の學問を辿つて研究して見ると、畢竟人間と云ふものは一種の動物ではあるが、非常に抵抗力の強い動物で、絶えず外界から來る處の壓迫刺激に對し、それに抵抗し押し切つて進み得るものである、それが抵抗しても勝つことが出来なくなりまして、亡くなつて仕舞ふのもあり、或は自分の方から、外界に調節して保存を遂げやうとするのであります、例へば冬になつて段々寒さが強くなつて來ると、能く之に抵抗し堪へ得るものもあるけれども、堪へ得られないものは其方法を圖るとになる、それ故に或る程度までは抵抗して行き、其後は調節して行くのであ

の構造を見れば解ることであり、諸姉はお母様になるお方々であります、無論お父さんにお成りにならんと思ひますが、其のお母様になると云ふ諸姉の御腹に、宿り始めの子供に就て申しますれば、始めは丁度魚の如く水を飲んだり吐いたりして居る時代がある、其次に龜の子と同じ様な状態になる時代があつて、それから木に登つて棲んで居る猿の様な状態の時代がある、お母様の御腹を出てからは四ツンばいに這つて居るが、暫くすると立つて歩く様になる、生れてから幼ない時は何も分らないで随分と困る事がある、男の子でも女の子でも、七八歳までは丸で野蠻時代の人と同じこととて、その時代を送りて半開時代になる、十一二歳の人は先づ半開の状態である、それから段々成長して種々の文明に接觸し、音楽とか美術とか宗教とか云ふものを味ふ事が出来るので若し半開の時代に於て進まなかつたならば、生涯半開の状態を終らなければなりません、さうであるから此時代より進んで行けば、遂に文明の階級に到達する事が出来ると同時に、その

進んで行く處に人間の價値が存するのである、我々は他に比類のない立派な日本と云ふ文明國に生まれまして、皇祖皇宗の御威光に照されながら生活を致して居る、此點は何とも申し様のない幸福なる次第であります、吾々が此の文明國に住む事の出来ること云ふのは、或る事を爲し得る可能性を有して居るからであります、けれどもそれは只だ身體の上に、又種々の行為に表はれた上の事を言ふのではない、人間の心の働きに基くのであります、更にもう少し進んで、人間の心の働きに神經の系統と云ふものがある、諸姉が學校へ行らつしやる頃から、神經系統が進み、從て心も開けて來るのであります、神經系統の發達と云ふものは、始めの時代は下等動物位の心の時代にあつたのが、次第に神經の開け方が進んだ状態になりまして、最後に大脳即ち人間の頭の前方が發達するのであります、私は禿げて居りますから前が大きく成つて居りますが、下等の動物は脊髄とかそれ等の下の方が先きに出て來て、それ以上の發達をしない、人間も母の胎内

に宿つた當時は、他の動物と同じ様に開けて居ない、其次に目が見えるとか耳が開えるとか云ふやうに、感覺の中樞になる所の脊髄等が働くと云ふ風になり、それから一番後れて大脳の前額に近い處が開けて來る、其處で人間の考へが起つて參るのであります、先づ子供の時は動物と同じ様な機械的の働いてあるから、心なしに悪い事をもする、感覺的の手足の運動が開けてそれから段々と高い程度まで開ける、さう云ふ譯でありますから、今私共が文明の世の中に生れて文明の人間を形造つて立派な心持を有つて居るが、此心持の中には、皆半開野蠻の心もあるものであるけれども、立派な高い心がある、高い心は何んであるかと申しますと、第一には道德とか宗教とか美術とか化學哲學とか云ふ様な文明が、國民の間に生れて來て其調和をして取締つて居る、この心が野蠻の心を締括つて居る、其締括りが緩んで來ると、人間は色々な亂暴を働く様になる、宗教心が無いと品格が悪くなり、道德が無いと秩序を紊すことになり、美術心が無いと人間に缺點を

生じて荒つぱくなり、優美な心が缺けて仕舞ふことになるのであります、斯う云ふ風に、どんな立派な人でも、動物の時代野蠻未開の時代があつたのであります、夫が追々今の様に文明に變化したと云ふのは、能く其心の統一が支配して居るからであります、其有様を婉麗なる筆を以て説明して居る文士がある、文士と言つた處で、今日の日本文士ではありません、日本に參つて居つたラツカンヘルムと云ふ人で、此人が日本と人と云ふ題を掲げて書いて居ります、外國の人であつたけれども後に小泉八雲と云ふて居りましたが、日本の風土の美なる事、且つ日本婦人は花の如く優美であると言ふ賞讃を與へて、世界の内に日本の婦人程やさしい心持を有つたものはない、眞に模範的婦人であると言ふて居つたが、其人に一の疑を起させましたのは斯くまで優美である、日本婦人が時によると、大變に男の様なことをする、或處に夫が他の人に辱しめられて殘念だと云つて居るのを、復讐をしない私も一緒に行きましようと言つて、夫を勵まして終に其人を殺害

に行つたと云ふことである、之は明治になつて十四五年頃の事でありましたが、此事に關しては、日本婦人は平素は美しい優しい天の使の如きものであるが、どうしてそんな殘忍な事をやるのであると材料を擧げて居る。それに就ては、日本の茶の湯に依て現はれて居る茶の湯の折に錦の布に包んだ中に素焼の茶碗がある、奇麗な布の中に粗末な素焼の茶碗を包んで居ると云ふ風に、日本の婦人の心は、素焼の茶碗を錦の布で包んで居る様なものである、日本の婦人が男と一緒になつて、復讐に行つたと云ふのは、昔其まゝの心であつて、今日の婦人もさう云ふ心を心の奥底に置いて、錦の布に包んであると云ふて書いてあります、けれども之は必ずしも日本婦人ばかりでなく、今日の文明國の人間は皆其通りである、野蠻時代未開時代には非常に殘酷な事を行つて、焼いたり焼かれたり突き殺すとか云ふやうな荒々しい暴行を致しまするので、破壊本能は皆人間の心の奥底に這入つて居るものであります、何か強い力を以て一番の上に蓋うて居りますか

ら立派に見ゆるのでありますけれども、最後の上皮を一枚剥くと、中からどんな物が出るか解らない、例へて見ると、ビツクリ箱のやうなもので、チャンと鍵が掛けてあると、何だか解らないけれども、鍵を開けるとビツクリする様な物が出て来るもので、今日の歐洲戦争は歴史あつて以来の大戦争で、その波及する所東洋にも及び、遂に世界的大戦争になつて居る、此戦争の有様を見ると、宗教は盛んに行はれ、道徳も哲學も科學も開けて、美術の國とか工業の國であるとか言つて文明を誇りとして居る人が、非常に残酷な戦争をして居る、併しこの戦争の状態に依て、宗教も哲學も美術も破壊して仕舞ふから罪悪であると申す人もありますけれども、それは無理な事で、戦争と云ふ事實を宗教や道徳の方面から考へて律することは出来ない、若し宗教とか道徳とか云ふ思想が國と國とを支配して居るならば戦争は起らないのであるが、どうしても戦争と云ふ事を行れば、何の國でも残酷な事をする、之は仕方がない、獨逸が何故彼の通り抗撃攻撃されて居るか、

争に於て高い重要な位置を占めなければならぬが、其重要な位置を占むるには、此二つの事を豊富にして進んで行かなくてはならぬ、それは何うであるかと云ふと、人間の身體は心と分けることが出来ないものであるが、身體の方は全く本能の爲めばかりに走りたがるもので、心の方は人間以上の佛とか神とか云ふものに近づかうとする、人の精神の働きの高尙になつて來れば必ず人間以上の神佛を標準として進まんとするものである、それに就てゲーテと云ふ人は、人は一種の麗しい優しい同情心に富んで居れば戦争のやうな殺伐な事は爲ない、宗教とか道徳とかによりて進んで行けば平和の發達を見ることが出來ると云はれて居りますが、いかにも高い理想を目覚めて心の發達した人であるならば、血を見なければ已まぬと云ふやうな荒々しい事は致さないものでありますけれども、人間が今日の狀態で進んで居る以上は、絶対に戦争を拒否することも出来ないものであるから、どうしても強い身體に鍛え上げて、充分に艱難に耐ゆることが出來なければならぬ、

要するに獨逸が誇りとする文明の寶を以て世界の人の寶としやうと云ふやうな心から、種々の政策を用ゐたので、それが他の國の思想と相容れざる處より戦争が起るに至つたものである、さうして此戦争の爲に再び得られないやうな物を破壊して仕舞ふ亂暴を働いて居るが、之は免れない事である、それ故に其事を戦争のある時は勿論、平素から充分に覺悟して居らなければならぬ、何故、人と人との間に美しい交際をして居たのが戦争になると酷いことをするやうになるか、之は如何に文明人であつても、人間の心理に於てさう云ふ一部の働きのあるからである、それで一國が戦争をすると云ふ事になると、其國民は敵愾心を起して全勝を得んとするは、之れ實に人の心の働きのあります、日本人が皆熱心に勝つやうに思つて居りますのは、日本人の、心其ものが斯くあるべきで、また戦争は日本の前途の運命に及んで來るから勝たなくてはならぬ、せん、それに就きましては、人間の健康衛生と云ふやうな事が非常に關係を有つて來る、國と國人と人との

自分の身體に立派な資格を付ける用意が大事である、昔しの語に獸身佛心と云ふ事がありまして、心は佛様の如く體は獸の様にしつかりせよとある、今日の文明の理想は獸の如く四肢で歩くと云ふやうなことでなく如何なる艱難にも耐ゆるやうに強い身體となつて、心は佛様のやうに麗はしくありたいのである、けれども一面に優しい佛の心と一面に艱難に耐ゆる強い身體と云ふ事は、此間始終矛盾が生ずるので、例へば學生が試験の成績を良くしやうとして夜も眠らずに勉強すると、成績は良くなつたが神經衰弱を起すと云ふ具合で人間は身體と心とが何時でも衝突して居る、此衝突をうけて悩むやうではいかぬ、一面に立派な優しい高い心を養つて行くと共に、一面には艱難に耐ゆる身體を鍛えて、兩方が相並んで進む所に、始めて偉大なる人格が完成せらるゝのである、この人格完成の根柢は、身體の方と精神の方と併行して發達せなければならぬのであります、然るに宗教を説くものは心を主として身體に重きを置かない傾きがあり、衛生學者は身體のみ

を主として心を軽んずる風がある、而し之は何れも考へが足りませんので、身體が強くつても心の働きの弱くしては宜しくないし、また心の働きの如何に立派でも身體の抵抗力がなくては、適當の生活を送る事が出来るものでない、而し其精神が根本であるから、充分に之を修養せなければならぬ人の感情及び意思の勢力は其身體に及ぼす關係は重大であつて、例へばせつば詰つてどうすることも出来ぬと云ふ場合には、平日は夫程でないと思つた人が、非常に強い働きのするものである、地震とか火事とか云ふ時には、後ではどうして之が持てたかと思ふに思ふほどのことが幾らもある之はつまり意思の方である、之はどうしてもせねばならぬと云ふ意思の刺激によりて、あらゆる筋肉の力が出て働くからである、斯う云ふ事は地震や火事の時になくとも、催眠術に關した事で證明が出来る、されは左程力の無い婦人でも子供でも、催眠術を施して机の様な重い物を持たせると、容易に持ち上げることの出来るものであると云ふと、夫を平氣で上げる、其代り

るに若い父母などは子供が足が冷たいなど、云ふと、お母さんを御覽なさい足袋も穿かないで働いて居るではないかと云ふ様な調子で、寒氣を恐れぬ様に諭すと其元氣に動かされて子供もさうかと思ひ、左程寒がりもせぬやうになるのである、何でも積極的に感情を働かせるとさうなるものであるから、こう云ふ關係を理解して置かねばならぬ

今日の體育及び衛生と云ふ事は、只だ身體の事のみ考へて居るのであるけれども、精神教育が出来なければ衛生の意義になつて居らない、總て人は精神的に希望がなければならぬ、希望がなければ幾ら甘い物を食べても仕方がない、何時も望みを以て居ると生々として、如何に苦しい事に出逢つても、恐れず撓まず勇奮することが出来るが、一度絶望の淵に沈んだならば身體は靦面に悪くなるものである、夫れから又何時も快潤の心を保たしめると云ふ事に注意せねばならぬ快潤の心は信仰より出て来る、例へば講演會の歸りに滑つて轉倒して怪我をして、ア、詰らぬ事をしたあんな講

又一枚の紙を持たせて、之は重くてお前には上からぬと云へば、それを持つて非常に努力して居るが上からぬ、之は間違のない事實である、即ち意思や感情が身體に勢力を及ぼすのであるから、精神的關係に於て身體は丈夫になるものである、又感情と疾病とは著しい關係がある。例へば戰爭に往つた人が怪我をして寝て居ても、其戦が味方の勝利だと云ふことを聞くと、其怪我の経過は良好となつて、早く戰爭に往きたいと云ふ様になるのであるが、夫が敗けたと云ふ悪い事を聞くと、其傷口も容易に治らなくつて膿をもつと云ふ様な事がある、之等は精神の作用に依つて身體の諸機關が著しく影響せられる適例である、また子供などを育てるには、消極的の感情を起させずに、何時も活潑な考へを持たすやうにせねばならぬ、老人の側に居る子供は自然氣分がイヂケて仕舞ふのが多い、それは子供が學校へ往かうとする時に、今日は雪が降つて寒いから寒い様にして行けと言つて標卷をしてやる、そこで子供も急にア、寒い／＼と思ふ様になつて仕舞ふ、然

演を聴きに往かなつたならば宜かつた、あんな處へ行つたからこんな怪我をしたと落膽すると、段々精神が沈んで仕舞ふのであるが、轉倒して怪我をしてもア、宜かつた、是が折れても仕方がなかつたのであるが、是位の事は仕方がない、擦りむいた位で結構であつたと思ふと、怪我をした處も別段痛いとは感ぜぬものである、何事も考へ様で、身體を大切にすることは精神から奮闘心が起つて来る、どんな困難があつても、それに抵抗して益々進んで行くと云ふ事は、身體と共に精神が快潤でなければ出来ぬ、この奮闘心が起れば運動も盛んにする様になつて、身體も驚くほど健康になるからこゝに衛生及び體育の目的を達することが出来るのであります、斯の如く精神の修養と身體の健康とを圖つて、さうして強い意志を以て今日の時局に當る覺悟が大切であります、いかに戰爭が長く續きましても、積極的に不撓の精神を以て、最後の平和を致す様にせねばならぬと信じます。

法華色讀論 (一)

本論は嘗て統一閣内に開催せし、天晴會夏期講習會に於て、『法華色讀』と題して、一場の講演を爲したるもの也、頃は本誌記者子が起稿を促すこと切なり、諒辭す可らず、專に當時の手續に幾分の修補を加へ、以て本誌に掲げ、聊その責を盡ぐ所以なり。

關田養叔

土籠御書に曰く

日蓮は明日佐渡の國にまかるなり、今夜の寒さにつけても、牢のうちのありさま、思ひやられて、いたはしくこそ候へ。あはれ殿は、法華經一部を色心二法共に遊ばしたる御身なれば、父母、六親一切衆生をもたすけ給ふべき御身也、法華經を、餘人の讀み候は、口ばかりことばばかりは讀めども心は讀まず、心は讀めども身に讀まず、色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ、天諸童子以爲給使、刀杖不加毒不能害と説かれて候へば、別の事はあるべからず、龍をばし出させ給ひ候は

ば、疾く來り給へ、見たてまつり、見たてまつらん、恐々金言。

緒言

法華色讀といふ文字は、もと日蓮主義者の間に於ける、一種の専門語でありまして、開は唯今拜讀いたしました所の、土籠御書の『法華經一部を色心二法共に遊ばしたる御身なれば』、『法華經を餘人の讀み候は、口ばかりことばばかりは讀めども心は讀まず心は讀めども身に讀まず、色心二法共に遊ばされたるこそ貴く候へ』といふ文より出て、日蓮主義者の間に、『身讀』

とか、或は『色讀』とか言ふて、非常に尊高なる意味に於て、盛んに用ゐらるゝのでありますが、近來は、新聞雜誌の上に於て、世間の文士が、頻に、此『色讀』といふ熟語を用ゐて居るのを見受けず、從來は、此の色讀なぞいふ熟語は、漢文にも國文にも無いのであります、これはやはり、近來日蓮主義の勃興につき、その影響として、一寸美文の中に用ゐても面白いので世間文士の注目を惹き、遂に多く用ゐらるゝ様になつたものと思ふ、これからの辭典に加へらるべき新語の一として甚だ愉快に存する次第であります。

斯く『色讀』といふ文字が、世間文士の間にも用ゐられ、又日蓮主義者の間には、最も多く使はれるのであります、自分は此の『法華色讀』といふ文字の意義に就いて、今少しく明瞭なる觀念を得て置きたいと思つて居ります所へ、此の度本會の爲に何か話をするやうにとの依頼でありますから、茲に『法華色讀論』と題し、法華經及び御妙判の説意を綜合して、『法華色讀』の意義及び内容を講述して見たいと思ふのであり

ます。

それで本講演の順序は、凡そ左の通りに致す積りてありますから、一寸豫め御披露申上げて置きます。

- (一) 法華色讀の解釋
- (二) 御書に顯はれたる色讀説
- (三) 法華は、始中終色讀主義を誨ゆ
- (四) 法華色讀とは法悦の感奮なり
- (五) 法華色讀とは護念力の實感なり
- (六) 法華色讀とは活ける菩薩行なり
- (七) 法華色讀の究竟目的
- (八) 法華色讀の最大特徴
- (九) 法華色讀史の雄観
- (十) 日蓮主義の過去現在未來

(一) 法華色讀の解釋
先づ最初に申上げたいのは、法華色讀といふ字義の解釋であります、嘗て或る信者の一人が、色讀といふのは『イロヨミ』と讀むのでせうか、阿だか變てすネと言はれたことがありましたが、能く黄色な聲を出す

などと云ふ事もあつて、法華宗の禱禱者などが五色の聲を振り立て、御經を讀む者があるから、「イロヨミーと言ふのだらうと思つたのかも知れないが、これは甚だ間違つた讀方でありませう。

「色讀」の色は、色身とか色體とか色形とか言ふことでありまして、即ち色とは肉體または身體の意味であつて、此の意味よりして、色讀を又は身讀とも申すのであります。

畢竟する所「法華色讀」とは、身を以て法華經を讀むといふことで、曾て吉田松陰が、尊王開港の説を唱へ、幕吏の手に捕はれ、關東に押送せられる時分に、

至誠ニシテ、動ゼザル者ハ、古ヨリ未ダ之レ有ラザルナリ、關左ノ行、身ヲ以テ之ヲ檢セン。

と言はれたことがありましたが、此「身ヲ以テ檢セン」と云ふことは「至誠」の文字は、口先きの講釋や、机上の談論では、到底味識することは出来ない、身を以て之を檢して見ると言つたので、至誠の色讀とも申すべきであります、これは日蓮聖人が

之を少しく例を擧げて申せば、
「如説修行」と申すことがあるが、即ち佛の説かれたるが如くに法華經を修行するといふことでこれも法華色讀といふ意義に外ならない、これは後にも少々申上げたいと思ひますが、兎に角、如説修行鈔といふ一書すらありて、法華經を實行する方法や、目的や、其意氣、覺悟等を説いてある位であります、次には

「菩薩行」といふことがあります、日蓮聖人が、
惡人無クシテ菩薩ニ留難ヲ爲サズバイカデカ功德ヲバ増長セシムベキ。(四思鈔)

と申してありますのは、是れ實に、法華經の主義目的を實行するに、迫害多難の間に立つて、勇往猛進するに非んば、不可能の事であつて、「所謂菩薩行」を積むことは出来ないものであると言ふので、此「菩薩行」といふことも、法華色讀の異名と見て差支ないのである。

この外に
「日蓮ハ不輕ノ跡ヲ繼グ」

法華經ノ如ク身命モ惜マズ修行シテ、此度佛法ノ定否ヲ心ミヨ(樂時鈔)

と申されてあること、能く似て居ると思ひます。ソコで今この法華色讀とは、法華經を口に讀んだ、心に讀んで悟つたと云ふことだけでは未だ足らない、身を以て實行的に眞劍に讀まねばならぬといふことであります。

それならば、身を以て法華經を讀むとは、如何なることかといふと、

法華經の主義信仰が、其まゝ我身の行ひとなりて頭はれて行く

といふことであります、即ち一行一切行と申しまして、法華信仰の、一行の中に包含せる、有ゆる美德が、直に一切の身の行ひに現れて、諸有の善根功德となつて働くことで、信仰中心の實行主義、活現主義であります。

この法華色讀とか身讀とか云ふ意義は、日蓮上人の遺文中には處々に、文字を換へて現はれて居ります、

「佛語ヲ助ク」

「況滅度後ノ鮮先ニ當ル」

等の語は、皆法華色讀の意に外ならない。

(二) 御書に顯はれたる色讀説

法華色讀といふことは、もと法華經の源泉より流出たのであるが、此法華經の權化たり體現者たる日蓮聖人にありては、是れが生命であり、主張であり、一代活動の事實そのものであつたのであります。

それですから、日蓮聖人は、建長五年四月二十八日旭日隱々として白雲を彩れる、清澄山頭立教開宗の曉より、弘安五年十月十三日、秋氣漸く老い暮霽寒煙を罩むる、池上の里に、非滅現滅の涅槃を示せし夕に至るまで、三十年間、千難萬難を踏破しての大獅子吼、大奮闘、大慈悲行を以て、法華經を色讀身讀したものである、法華の信仰を體現したものであると、自信して居たのである。

要を以て之を言はば、我身一代の行藏の跡は、哀愍救護の血涙を以て、法華經を活讀したる事實的證明である。

あると云ふことである。
斯る意義に於て、日蓮聖人の御遺文を拜讀いたし
すると、全篇悉くこれであつて、則ち幾多の本化宗
教の重要教義といふものは、此の思想の裡に、麗しく
鮮に織りなされて居るのであります、

これより一二の御書を擧げて見ますれば、
法華經第五ノ卷、勸持品ノ二十行ノ偈ハ、日蓮ダ
ニモ此國ニ生レズバ、ホトシト世尊ハ大安語ノ人、
八十萬億那由佗ノ菩薩ハ、提婆ガ虚誑罪ニモ墮チ
ヌベシ、經ニ云ク、有諸無智人、惡口罵詈訕、加
刀杖瓦石等云云、今ハ世ヲ見ルニ日蓮ヨリ外ノ諸
僧、タレノ人カ法華經ニツケテ諸人ニ惡口罵詈訕セ
ラレ、刀杖等ヲ加ヘラル者アル、日蓮ナクバ此一
偈ノ未來記ハ安語トナリヌ、惡世中比丘邪智心箱
曲、又云ク與白衣說法、爲世所恭敬、如六通羅漢、
此等ノ經文ハ、今ノ世ノ念佛者禪宗等ノ法師ナク
バ、世尊ハ大安語ノ人、常在大衆中乃至向國王大
臣婆羅門居士等、今ノ世ノ僧等、日蓮ヲ譏奏シテ

受ケテ是程ノ 呪ハ何事カ候ベキ。(四思鈔)
斯る聖人の御考は、伊豆流罪の當時のみて無く、一代
を通じての法華色讀行を告白せられしものと解釋すべ
きである。

次に日蓮聖人が、法華色讀の意義及び狀態等を説明
したる御妙判も澤山ありますが、先づ實行主義、身讀
色讀主義を一般的に説明したものは、

八萬四千ノ法藏ハ、我一身ガ日記文書ナリ。

(總論文鈔)

この文章は釋迦牟尼世尊の説き示し給ひたる、八萬四
千の佛教法藏、その教義頗る廣大無邊なりといふも、
畢竟これ我一身の語默作行行動云々を指導し説明し記
録したもので、如何に其の教が、尊貴である、有り難
いものであると云ふたとて、之を實行せねば何の役に
も立たぬと言ふ事を誠告せられしもので、彼の陸象山
の「六經我ヲ註ス」と言ひし思想と、殆ど同じやうな
説である「八萬四千ノ法藏」と一般的に申されて居る
ようだが、聖人の本旨は、八萬法藏の中心實歸たる、

流罪セズバ此經文ムナシ、又云ク數々見擧出等云
云、日蓮法華經ノ故ニ度々流サレズバ數々ノ二字
イカンガセン、此二字ハ天台傳教モ未ダ讀ミ給ハ
ズ況ヤ餘人ヲヤ、末法ノ始ノシルシ恐怖惡世中ノ
金言ノ合フ故ニ、但日蓮一人コレヲ讀メリ。

(開目鈔)

これは有名な御文章で、此文章の思想を概括して
申せば、惡口罵詈訕、讒表毒舌、三類の障蔽の蜂起、さて
は、流罪死罪等の忍難重苦の間に、法華經主義の軍旗
を懸へし勇往邁進するは、是れ法華經を色讀するので
あつて、唯日蓮一人之を讀むだけである、即ち日蓮一
代の事業と奮闘とは、是れ佛語を證明し、法華經を現
實に證言するものであるといふのである。

それから又伊豆流罪中に御書さになつたる「四思鈔」
の中には法華經弘通の故に、現在伊豆の伊東に流罪の
身となれるを叙し、其次に左の文がある、

法華經ノ故ニカ、ル身トナリテ候ヘバ、行住坐臥
ニ法華經ヲ讀ミ行ズルニテコソ候ヘ、人間ニ生ラ

法華經に存することは勿論のことであるから、法華經
如何に尊貴高遠なるも、之を我一身の上に持ち來て、
躬行實踐せなければ何の効果も無いといふことを示し
やはり、之れは法華色讀の一面を訓誨せられしものと
信ずべきである。

當世ノ人ハ、詞ト心ト總テ合ハズ、孝經ヲ以テ、
其親ヲ打ツガ如シ、豈ニ冥ノ照覽難カシカラザラ
ンヤ。(持妙法華問答鈔)

これも非常に痛切なる御教訓で、「當世ノ人ハ詞ト心ト
總テ合ハズ云云」とは反面よりして、聖人が懐抱せる
身讀色讀主義の思想を、表現せられたものと拜すべき
は、言ふ迄も無い事である。

圓教ノ六即ノ位ニ、觀行即ト申スハ行フ所ハ
言フ所ノ如クス、言フ所ハ行フ所ノ如クス云云、
理即名字ノ人ハ圓人ナレドモ、言ノミアリテ眞ナ
ル事カタシ、例セバ外典ノ三墳五典ニハ讀ム人カ
ズヲ知ラズ、彼ガ如クニ世ヲ治メフルマフ事、千
萬ガ一ツモカタシ、サレバ世ノヲサマル事モ又カ

タシ、法華經ハ紙付ニ音ヲアゲテ讀メドモ、彼ノ經文ノ如クフレマフ（振舞）事カタク候……今日蓮法華經一部ヨミテ候、一句一偈ニ猶受記ヲ蒙レリ、何ニ況ヤ一部ヲヤト、イヨ々々タノモシ、但オホケナク國土マデトコソ思ヒテ候ヘドモ我ト用ラレス世ナレバ力及バズ。（轉受輕受法門）

此の御文章は、色讀主義の狀態を、委細に説明し告白せられたもので、實に熟讀玩味し來れば、尊き味が彬々として盡さざるの感があるのであります。「行フ所ハ言フ所ノ如クス、言フ所ハ行フ所ノ如クス」等とは觀行、即の人に假りて色讀の本面目を訓誨せられたるもので、是れ實に聖人が常に自ら心に期せられ、又弟子信者の人々にも訓誨せられしことと思ひます。「法華經ハ紙付に音ヲアゲテ讀メドモ……」等の文字は、法華經は慈愍悲腸の行者に依り色讀せられて始めて其本質の光輝を放ち、又、人の世に功德の花を開き、利益の實を結ぶものなるが、是實に行者の最も難事とする所なりとて、大に色讀主義を勸奨せられたるものである。

「今、日蓮、法華經一部ヨミテ候……」とは茲に「一部」といへばとて、八卷の冊数を音讀したりとの意に非ず、法華全典を一貫せる主義理想を我身に體現せりといふ意義にて、勿論色讀せりとの意である、

「オホケナク國土マデトコソ思ヒテ候」とは身分不相應にも此の大日本の國土までをも救濟せんと念願せりといふ意味で、之れは法華色讀の事實其ものを擧げたのである、世を憐れ國を憂ひ、國體の尊嚴を主張し、大義名分を絶叫し、法國冥合の大理想を披瀝する等、皆これ法華色讀の一面なるを示されたのである。

「我レト用ラレス世ナレバ力及バズ」とは、聖人が獻身主張せる國體擁護の孤忠も武門諫争の赤誠も國亂れ世濁りて、一國に用ゐられず、所謂「下和が涕泣、伍子胥が悲傷」を學ぶの止むなきに至れるを慨歎し聖人胸中の公憤を漏らしたものである。

序に申上げて置きますが、此の「轉受輕受法門」は日蓮聖人が、龍口の巨難を逃れて、依知の本間六郎の邸に預けられた中に認めて、檀越三名に與へられたも

のて時と云ひ境遇と云ひ、當年に於ける聖人の意氣精神が如何に躍動せるかを觀るべきである。

次に本論の冒頭に掲げし有名なる「土龍御書」之は日蓮聖人が將に明日を以て佐渡流罪の途に上らんとせし時に、御弟子日朝上人に與へられたるものであります。

と讀誦し、或は文を尋ね義を析して、經旨を解釋せんとするを云ひ、「心ハヨメドモ……」とは、「是ノ心是レ佛ナリ、我レ法華ヲ轉ズ」杯と獨り悟り顔する禪宗の坊さんや、三千三諦の理鏡の如く明に、實相真如の旨、月の如く朗に法華の極意悉く通達し了ると澄し込んだ天台の徒杯を言ふので、日蓮聖人以前の佛教者並に法華經信奉者の爲しつゝあつたとは、多くこれであつた。

御身ナレバ、父母六親一切衆生ヲモ助ケ給フベキ御身也。

法華經ヲ餘人ノ讀ミ候ハ、口バカリコトババカリハ讀メドモ心ハ讀マズ心ハヨメドモ、身ニ讀マズ色心ニ法トモニ遊テレタルコソ貴ク候ヘ云云。

此の御書は「法華色讀」なる四大文字の出處であり、本據でありまして、「法華經一部ヲ色心ニ法共ニ遊バシタル」といひ、「口バカリ語バカリハ讀メドモ心ハ讀マズ、心ハ讀メドモ身ニ讀マズ、色心ニ法トモニ遊バシレタルコソ貴ク候ヘ等」といふもの、法華色讀の眞諦を發揮して餘蘊なきものであります。

此の中に「口バカリ語バカリ」とは、或は聲を揚げ

即ち香煙梵唄の間に八講の式を嚴にし千卷經を誦するとか、或は山林深く義學の窓に閉ぢ籠り、講經の深遠を誇り、三昧の床に座して悟道の卓越を誇るなど、皆これ世を益せず人を利せず、國を濟はず、徒らに其の外形は立派で、法華經の根本精神は死んで居るのである。

日蓮聖人は、斯る山林佛教談理佛教を排して、茲に清新活躍的「法華色讀」といへる佛教の精華を發揮したのであつて、之を「身ニ讀ム」とも「色心ニ法トモニ遊バス」とも言ふたのである。

嗚呼、偉大なる哉、法華色讀の妙行、

欄友誌

山陽母に奉ずるの動機

於伊豫之客舎 影 山 謙 二

頼山陽先生の父公、春水先生が身を一紺屋職の子に起して、立志、發憤、黽勉努力の結果、遂に中國の大雄藩たる藝州公の藩儒を贏ち得たる事歴が前號に詳記せられた、予は少からず感興を以て敬誦した、て、這こには其春水先生の子、山陽先生が至孝の人で、而かもとり別け、母公に對して奉侍孝養の赤誠を傾注せらるゝに至つた「動機」に就て、予の聞くが儘を記して見やうと思ふ、

先生が京都に在て、一日、其塾生を集めて莊子を講ぜられたつゝある真最中に、先生の國許から、飛札到來、開て見れば父公(春水)大病との凶報である、乃て先生は取る物も取り敢へず、見臺に展べた書物さへも其儘に、即刻出發して、晝夜兼行、郷里に歸着せられた比は、あはれ父公は既に締切れた後であつた、先生は親公の臨終に逢はれなかつた事を痛く悔恨の極として悲まれ、爾來、斷然、終生再び莊子を講じなかつたと云ふ、此の「莊子禁講」の美談は、世に普く傳はる處であるが、却説、先生年三十一二歳の時、かの有名なる心血の大文字「日本外史」を著述したつた、而して先生自ら以爲く、天下孰れか會心の友を索めて、窮かに是の

口んぬる哉先生、且つ卒下に惟ふた、君子日三省吾身」と、遂に背汗三尺、流れて止まるを知らず、出て、唱然として嘆じて曰く、實に理り有る哉上人の言や、流石は、是の書亦何の詮か有らんと、先生驟然、遂に其翌朝鷄鳴侵曉、京都を發足して藝州竹原に歸り、具さに母公を奉じて再び京に上り、日夕旦暮、造次顛沛、至念嘗て怠らず、花の春、月の秋、時到らば毎に母公を奉じて、或は嵐山に、或は吉野に、或時は近江の琵琶湖に、或時は伊勢の五十鈴川に、悠々母公の老を扶けて、且つ慰め且つ勞はられた、其他、凡て先生が母公に對して如何に深く純孝至行の美はしく且つ温かさ感情に満ち充ちて居られたかは、多くの詩歌の上にも顯はれて居る、

翌曉作

別、母猶夢、母、分明侍、膝前、醒來知何處、蓬底獨爲眠、

憶母

既見、妻兒面、回頭憶、阿娘、阿娘難、可、見、江海頓茫茫、秋風吹、吾冷、遠吹、木葉、飛、吹到、故園樹、莫、侵、慈母衣、

奉、母遊、吉野山

前庭尋、春花既闌、今來暖雪照、人顔、十年機補、平生缺、奉、母重遊、吉野、

奉、母遊、嵐山、前、此丁、外難、尋西遊、不、遊五年

書を覽せて、衷心自ら慰めんと、乍去世は今明治大正の大御代の如くに言論著作の自由を有せず、幕府は恒に學者の口を緘して居るので、日本外史の如き堂々たる勤王論、皇室の式微を慨嘆する裏面に幕府の權柄を憤慨する大論策、名こそ歴史なれ、其實は「文底秘沈」の大倒幕論、斯かる文献著作を當時世に公けにする事を許さなないのは云ふ迄もない、隨て烏柯々々誰れ彼れ擇ばずに見せる事は實以て危険千萬である、乃て思慮思索の結果、當時宗教界に名を擧げて居つた學頭法海上人に思ひを寄せ且つ囑目せられたが、未だ面識がない、仍て平生先生と友とし善かつた僧大舍、此の和尙は、後年に至て先生が九州耶馬溪に遊ばれし時の作、即かの名文章として天下に鳴り渡つた「耶馬溪記」の中に、「詣古城正行寺、寺主舍公、余故人、埃余既久」遂に相許す中である、乃て先生は此の大舍を紹介者として法海上人に覽せるべく、日本外史廿二卷の内、最も先生自慢の卷たる第五卷、即ち「楠氏の卷」を懐中にして、大舍に連れられたつ、法海上人を訪はれた、思ひさや、法海上人は先生に面會を拒絶し、且つ大舍に向つて謂た「聞く藝僧久太郎なる者京に在り、飲酒三年、其親を省ず、而して忠臣楠氏の傳を作ると、足下豈に是れ歟、忠臣は必らず孝子の門に求む、今不孝の子にして忠臣の傳を作る、楠氏知るあらば、必らず之を屠しとせじ、老納亦不孝の人を見るを好まず」と、嗚呼

矣。

不、到、嵐山、己五年、萬株花木倍鮮妍、最忻阿母同、衾枕、連夜香雲暖處眠。

中秋無月侍母

不、同、此夜二十三回、重得、秋風奉、一、厄、不、恨、會前無、月色、免、看、兒、子、鬢、邊、絲。

侍、母、東、上、舟、中、作

一蓬掠過白鷗烟、臥閱、青山、總、可、憐、聞、得、舟、人、呼、飯、熟、船、窓、推、醒、阿、娘、眠。

奉、母、及、叔、父、一、遊、嵐、山

春蟾無、魄、吐、瓊、華、閨、闥、山、櫻、晚、較、些、幾、片、香、雪、明、夜、映、十、分、月、色、五、分、花。

小阮吟、詩、大、阮、眠、同、澆、磊、落、共、陶、然、一、瓢、已、倒、春、宵、短、花、壓、溪、窓、一、月、在、天。

いすく川いすくの時にな、とちの母を伴ひもよんでけるかな

なかにも、かの吉野行遊の時の如き、先生自ら「奉、母重遊、吉野山」と風吟懐せられた時に、偶々母公が満山櫻花の爛漫たるを見て、「之れにて我平生の願は足れり」と、打ち興ぜらるゝを看るに及んで、先生元來寡黙の性、喜怒皆て色に表はさぬ人なりしも、此時許りは「阿母の此一言を得たるは、宰相と成れるに勝れり」と云ふて、欣然として雀躍せられたとの事である、實に左もありつべしと想はれる、我々は此の話を

聴くだに、先生の母公孝養の有様を目のあたりに側観するの感がある、先生、斯かる純孝至純の人たるに至りしは、人道的に折伏せられたのが動機である、茲に之を憶ふに當つて、吾人が此の「折伏」てふ事の徳に就て、直ちに深き興味を以て聯想せずに居られぬのは、聖日蓮大上人の「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」てふ格言的佛道上の四大折伏である、乃至復亦、我聖祖に由て道破せられた「孝と申すは高也、天高しと雖も孝よりは高からず。孝と申すは厚也、地厚しと雖も孝よりは厚からず。忠臣は必ず孝の門に出たり矣」との深遠廣大なる慈教である、嗚呼々々、記して爰に至て悵然として言ふ處を知らぬのである、

△時 日

十月二十日午後一時開會

△會 場

芝二本榎承教寺(日蓮宗舊院所在地)

▲主催 本化記者團

日蓮主義大講演會

講	「布教」	蓮出孝潤君
	「法響」	石田顯隆君
	「統一」	三上義徹君
師	「日宗新報」	加藤文雄君
	「統一評論」	高鍋日統君

(本團事務所 小石川白山前町十七番地)

▲統一讀者に告ぐ▼

▲購讀料金未拂者の御方には書狀及集金郵便にて御都合伺候へしが如何なる次第なるか拒絶の方もあり又何の御沙汰のなき方もあり 近頃迷惑の次第何卒至急御拂込下さるやう御願申候也



活動史

△本欄は日蓮主義が王佛冥合の理想實現を期するがために其熱心なる運動の實況を報じて意氣ある日蓮主義者の態度を明かにするものなれば所屬宗派を問はず事實を通信せらるれば之を掲ぐべし

東京

世は軍國となりぬ人の心も態度も沈着を缺くことありては一大事いでや日蓮主義の愛國的血精を注射し戦時國民の剛毅なる氣象を養はねばならぬこの重大なる任務は日蓮主義の使命であると共に愈々時局に處する歸向を示すべく講演會を開催せり

▲九月十三日午後一時統一閣講演「戦と死三上義徹」時局と信仰井村日成「我邦の使命と日蓮主義本多日生」講師の熱烈なる辯論と卓越の識見とは戦時國民の方向を示して信仰の要を自覺せしむるものありたり

▲十六日午後一時地明會講演開催

「所謂善女人山根日東」婦人の覺悟本多日生「何れも婦人の修養及價值とを詳説して努力の精神を鼓舞せられたれば感銘して法益を得たり

▲二十日午後一時統一閣日曜講演高木本順師は信仰の強烈を教へ「爾を襲ふ兩面の敵を屠れ三上義徹」天晴地明本多日生「其の立論堂々として風教確立の策を論明せらる

▲二十七日午後一時統一閣日曜講演三上義徹師の日蓮研究に對する觀察の要義を教へ關田養叔師の宗教判斷の標準より人生の終局を説いて各人の生命不滅を示し本多日生師天晴地明の内容を詳説して豊富なる教義を示し宗教の最高指針なる所以を論定せられ聴者の肺腑に感銘せしむるものありたり

▲十月四日午後一時統一閣日曜講演吉田堅晴師の玉となつて碎くるも瓦の全きは恥づる所以を述べ野日日主師は統一軍の意義を詳述し如説修行の意義を感得せしむ

京都

▲小石川白山坂上白山會は月四回の講演を開き聴衆は少なきも熱心傳道に努めて居る聴衆は學生のみであるが合掌唱題せざるものないと云ふ成績である法主の家人は無勢なりと云ふ聖訓を色讀せよ

▲西都の教界は儀式佛教の觀ありて近き將來に其の衰滅を招くべき状態にあるも獨り日蓮主義の運動は活ける感化を與へて人心を復活せしめつゝあり九月一日午前八時妙滿寺に於いて皇軍戰捷平和克復の祈禱會を修せり更に文部大臣の諭告に注意條項を添へたる印刷物を配付し同夜成就院に護正會を開き川崎英照師開目抄の講義をなす八日大慈院に婦人會を開き銀井乾升師の法話あり十日成就院に護正會例會を開き十三日妙滿寺に報恩會を修し石井寛俊師本述論を説く十五日千本壽量寺に演說會を開き西村喜一郎君時局と信仰との關係を述べ石井寛俊師迷信を破り正信を叫び金光孝碩師時局に對する日蓮聖人の主張

を明かにし十六日夜法光院に妙法
婦人會を開き金光師本佛の大悲を
説き同夜鐘紡會社の修養會に川崎
英照師軍國民の精神修養に就て熱
烈なる講演をなし十八日妙満寺に
開講石井寛俊師特長ある法華經の
教義を述べ銀井師富と徳との關係
を述べて法華經の養生業等皆順正
法の法義に結び川崎英照師は戰爭
果して罪惡かを出發點として經釋
妙判の典據により正義の爲めには
刀劍弓箭を持するも可なりと説く
廿一日妙満寺に彼岸會を修し川崎
師軍國に於ける我徒の任務に就て
其本領を發揮すべきを説く廿二日
顯正會を修し金光師戰時國民の態
度を説明し同日正行院に婦人會を
開き金光師時代の信仰を述べ二十
三日本正寺に彼岸會を修し野口日
主師正と戀とに就て信仰の要義を
説く二十四日妙満寺の彼岸會に際
し野口師の懇篤なる法話あり二十
五日夜妙満寺講堂に京都天晴會戰
時講演會を開き兼田幹事開會を述
べ京華日報記者江羅直三郎氏戰後

に於ける我國の任務は商業に工業
に又軍事に更に思想上に於ける大
變遷來るべし此際に我徒の任務の
重大なるを説く野口日主師は生物
は凡べて戰爭の形式を備ふ人間何
ぞ戰を免れんや此際日蓮主義は大
に其本領を發揮すべしと説く二十
六日夜妙満寺に帝大三高工業の
學生日蓮研究會を開き川崎英照師
日蓮聖人の教義及人格に就て講演
をなし終つて將來發展の協議をな
せり會するもの三十餘名將來有望
の會なるを認む二十七日妙満寺に
彼岸結日法會を修し石井師法話を
爲せり九月中の妙満寺を中心とし
たる運動以上の如し

大阪

における商工業の發業
は目覺しきものあるが
思想上の運動は一向振はない宗
教家の自覺せざる點もあらうが
市民の風潮が拜金主義なるからて
あるされば人として全生活を送ら
しむるには宗教徒の努力一番を要
する所である九月十二日午後一時
東區西高津中寺町蓮成寺に於て宗

岡山

祖龍口法難會を嚴修し法話を爲せ
り「信施に就て棍木日種」十二日
午後七時半玉中寺町堂閣寺に於て
公開演說會を開く「迷信を破す三
好信道」或恩の生活京華義應「戰
争と宗教棍木日種」十三日午後七
時西高津中寺町蓮成寺にて公開
演說を開催し「信行道三好信道」
「同情の生活京華義應」「心を師と
せされ銀井乾升」「戰時に於ける
國民の覺悟棍木日種」二十二日午
後一時生玉前堂閣寺に婦人會を
開き京華師は日蓮上人と婦人との
關係を述べ川崎英照師は婦人の修
養に就て懇説する所ありて感動を
與へたり二十四日午後一時蓮成寺
にて彼岸會を修行し法話を爲せり
「法華の信心三好信道」「感應棍木
日種」會衆多からざるも開會毎に
熱烈なる信仰家を見るに至るは法
益の甚大なるを知るなり

演說二十數回にして感化亦偉大な
るものあり

福井

相生町妙經寺にては九
月二十一日二十四日二
十七日の三回に亘り法要を行ひ増
田聖道師の信心の心得と成佛大關
をば日輪破るとの意味を説き指道
せられたりと云ふ

九州

久留米市寺町本泰寺に
於て九月一日中原通應
師導師にて莊嚴なる孟蘭盆施餓鬼
法要を勤修し「平岡本信受持成佛」
出海俊義孟蘭盆供養の意義に就
て説教あり滿堂の信男女に多大の
法華を雨せり三池郡新興寺にて九
月五日出海俊義師導師にて盆施餓
鬼會を奉修し晝夜二回五座の説教
を勤めたり「佛となる道平岡本信」
「確實の信を要す中原布教師」「大
菩提吉見法榮」「信の力中原通應」
「女人成佛出海俊義」各師獨特の熱
辯を振つて多大の感動を與へその
心田に良種子を植へ附けたるを認
む柳河町妙經寺にては九月六日中
原師の導師にて施餓鬼會を修行し
て道場を嚴淨して非常の盛況なり

し渡瀬新興寺にては九月十二日例
月の御講及説教を勤め出海俊義師
の「歡喜信樂」の題下に眞信仰の生
命を會得せしめぬ九月十六日出海
師は同部手鎌村同窓會に於て「歐
洲の戦亂に就て帝國國民の眞使命」
とし二時間の講演を爲し二百數十
名の會員をして自覺と奮起を爲さ
しめたり次いで同日午後二時同部
倉永村同窓會講演に出席し倉永校
に於て「大日本國民特に青年の自
覺」に就て二百餘名の同窓會員又
は來賓等に甚大なる感化を與へ二
十日又倉永青年會の懇請に依り通
俗講演會を小學校講堂にて開催適
切なる幻燈映畫を應用し出海師の
切實なる説明と相待つて百數十名
の聽衆に歡喜法悦を與へたり柳河
妙經寺に九月二十一日彼岸會説教
を開催し中原布教師が熱誠を以て
大法輪を轉ぜられ大に信仰を鼓吹
された久留米本泰寺に二十四日彼
岸會施餓鬼を舉行し法要後「吉見
法榮實在の御佛」任職中原師の「信
仰と死」の説教ありて多數の善男

▲和氣町本成寺に於て九月一日夜
戰勝新念及戰時講話を開けり「戰
歴と信徒の心得原田日勇」四日山
田村岡本善四郎宅にて講演「開會
の辭從野健三郎」信仰の實義原田
日勇「十五日本成寺婦人會にて」佛
の室宅に就て原田日勇「十六日本
成寺同信會を」偉人の跡原田日勇
十九日鹽田村小學校にて校友會あ
り校長の挨拶と會友の五分間演說
後「生存の意義原田日勇」會衆多く
盛況にして感動多大なり廿一日
夜本成寺にて彼岸法要并に講話あ
り「惣名と別名原田日勇」二十三
日三國村小學校にて青年團總會あ
り團長の辭及青年の心得「趣味あ
る生活原田日勇」廿四日本成寺に
て彼岸法要講演「本尊の内容原田
日勇」二十七日夜本成寺にて講演
「佛陀の活動原田日勇」二十八日赤
磐郡平松義三宅にて「世法即佛
法原田日勇」以上の講演により日
蓮主義の信仰を作興するものあり

◀ 書きべす讀必の民國軍 ▶

天晴會講演錄

(第貳輯) (價格金貳圓也)
(郵税金拾貳錢也)

▼本書は現代知名の諸先生が日蓮上人の人格及教義の研鑽を發表したるもの、日蓮主義が眞理批判の上に、また國民思想教養の上に、殊に國家存立の關係に於て、如何なる地位と權威とを有するかは、須らく本書六百餘頁に亘る金玉の文字によつて之を知るを得べし

内 容
林陸軍中將。本多大僧正。井上中佐。小笠原子爵。小林文學士。高島平三郎先生
辻文學博士。松森僧正。五島子爵。姉崎文學博士。柴田一能先生。竹内久一先生
田中智學先生等の講演也

精神の修養

各一部 金貳拾錢也
二部 小包 金八錢
一部 郵税 金六錢

▲申込 東京市小石川區白山前町十七番地 三上義徹。送金は(振替口座東京二八八四〇) 當へ拂込む事

在郷軍人と士氣振興

男爵 陸軍中將 黑瀬義門

佛教の尊嚴と世人の妄見

辯護士 久富勘太郎

▲百七十五年以後の日本 ▲日宗教團有志大會 ▲決戦と持久力

三上義徹

▲歐洲大戰と面白き統計 ▲慚愧の美服 ▲國民思想動搖の原因

文學博士 藤井健治郎

統一

號七十三百二第

號月壹拾

我邦の使命と日蓮主義

大僧正 本多日生

日蓮門下七教團統合合成